

学ぶ

by 学生スタッフ

コロナ下の恋愛事情

オンライン交流に活路

新型コロナウイルス禍で大学の授業はオンライン、合宿は中止、飲み会もなし。今、学生はどのように出会い、愛を育むのか。スマートフォンアプリを使った「オンライン交流」に活路を見いだす一方、「コロナ下だからこそ、近くにいたい」と対面を求める切実な声も。時代を映す恋愛事情を学生スタッフと探った。(白井春菜、名古屋外国語大三年・新井抄耶香)

愛知県の大学二年あやさん(20)は「愛知は韓国の大学生と交流八カ月。語学学習アプリ「ハロートーク」がきっかけ。昨年一月末に韓国語の習得で使い始めた。コロナで出掛けづらい中、外国語が母語の利用者とチャットできる点が魅力。二月上旬、日本語を学ぶジョンチャンさんと知り合い、学習を支え合った。共に犬を飼い、食べ物の好みも同じ。意気投合した。私的な内容が増え、韓国で主流の無料通信アプリ「カカオトーク」も活用。十月、ジョンチャンさんの「好きです」とのメッセージに「私も」と即答。一度も会わずに始める交際に不安があったが「電話で親友を紹介してくれて話し、信頼が深まった」。会話は日本語と韓国語、英語。国際郵便で自国の菓子や食材を互いに送り、料理を教え合っ。誕生日には花束が届いた。あやさんは「会いたくても会えないから仕方ない。実際に至るまでの過程が逆に

なっただけ」と前向きだ。

出会いが目的のマッチングアプリは手軽な手段の一つ。岐阜県の女子学生は今年四月末にアプリで出会った男性と二週間後に対面し、その六日後に付き合い始めた。電話やLINEを毎日こまめに返してきて距離が縮まった。相手を探さず段階で同じ県内に住む条件にし、月一回は会えているという。

ただ、アプリを使いこなしのは簡単ではない。愛知県の男子学生は「出会いがないと嘆くだけでは駄目と思い、勇気を振り絞って始めた」。が、途中で相手のメッセージが途絶えることも。「趣味や好きな食べ物など自分の等身大が

「会いたい」切実な声も

伝わるような写真とプロフィールに差し替え、次の出会いを探している。自己PR力の大事さを痛感した」とこぼす。恋人との物理的な距離に悩み、近くの就職先を選ぶ学生も。東海地方の女子学生は、家で過ごす時間が増えて始めた動画配信アプリで関西地方の会社員と知り合い、昨年十一月から交際中。電話しながら同じ家庭用ゲーム機を楽しま、実況し合う。会つのは月一回ほど。スーパーと消費が徹底されたゲームセンター以外に行かず、帰宅後はしっかりと手を洗う。教育実習の前は会いに行くのを我慢した。本年度、相手が住む地域の教員採用試験を受ける予定。自分の地元と迷ったが、決める手は「何かあったとき、そばにいたい」という思い。離れて住んでいるだけで、会うことに後ろめたさを感じなきゃならない今はとても苦しい

悪意見抜くりテラシーも必要

青年期の対人関係に詳しい、愛知教育大の中井大介准教授(20)は「発達心理学」にコロナ下の若者の恋愛について聞いた。

恋愛は①出会い②進展③深化の過程をたどる。コロナ禍で出会いと進展の機会が減りどんな人かを見立てるための情報も得にくい。

心理学では「単純接触効果」といって、繰り返し会うだけでも好意が増すとされる。対面やスキミングは、快楽をもたらずドーパミンや、愛情を抱かせるオキシトシンといったホルモンの分泌を促す。出会いや恋愛初期の段階で会う機会は重要だ。だが、海外にいて会えずとも、国際交流に抵抗がない二人が外国語習得の共同作業

を行い、相性などの条件も整えば信頼関係が築ける可能性はある。写真と限られた情報を基に出会うマッチングアプリは外見的な魅力の高い人や、自分をうまくアピールする「主張的自己表示」が得意な人に有利。匿名性の高いアプリは、悪意を持った人を見抜くりテラシーも求められる。

遠距離恋愛には時間、労力、金銭といったコストがかかる。外出が制限される今、精神的なコストも。同居や結婚を選択する例も増える。青年期はアイデンティティを獲得する時期。職業選択と同様に、恋愛でも社会の中で自分らしさを見つけていく。もちろん恋愛に興味がない人も。自然な感情を大切にしたい。